
幽ろい

96

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幽ろい

【Nコード】

N8416V

【作者名】

96

【あらすじ】

「俺」と友人たちの怪奇録。 霊は見えないツツコミ体質の「俺」のツレは、規格外の靈感の持ち主。 名前は竜彦（男）とマナ（女）。 彼らは、今日も「俺」を巻き込んで怪奇の扉を叩く。「俺」視点の一話完結ショートショート。 こんな人たちがそばにいたら、幽霊も怖くないかも。

紐

俺のツレの一人である、竜彦 たつひこ から聞いた話。

地元の駅に大きな道路がクロスしている、いわゆる「交差点」がある。

昔は交通事故が多かったらしいそこは、分離型の信号になって久しい。完全に車と人が別れて移動するから、渡るのに時間はかかるが事故は激減している。

それでもたまに。

キキーツ

大きなブレーキ音の後に、鈍い肉の音。ツレは渡ったばかりの交差点を振り返ったそうだ。

見れば、サラリーマン風の男が血まみれで道路に倒れている。はねた乗用車から慌てふためいて、オバサンが出てきて、この人が赤信号で飛び出てきたんだ！ とわめく声が聞こえた。

彼は野次馬の一人で、頭から血を流している男を見て呆然とするしかなかった。

そこで、ふと倒れたままのサラリーマンの首に、巻かれた紐に気づいた。

(なんだ？ あれ)

首元に巻き付いていたそれは、ゆっくりと動いてサラリーマンの身体から外れる。

なんとなしに紐の元を辿っていくと……視線が、空へ持ち上がった。

「……ッ」

太陽を覆い隠すような大きな雲の、小さな隙間。そこから、誰かの充血した目玉が覗いていた。

スルスルスルスルスル、紐は空へと持ち上げられていく。覗いている目玉が動く気配があって、ツレは慌てて視線をそらした。

あいつに気づかれてはいけない、と咄嗟に思ったそうだ。

どのくらい時間が経っただろうか。

救急車のサイレンが聞こえてきて、野次馬も興味を失ったようにそれぞれの日常へ戻っていく。

ツレも学校に向かおうと思って。気になったのでもう一度だけ空を見た。

けれどそこにはもう、さきほどの雲はどこにもなかった。

門の前

「アイス食べたい」

ある日のこと。

ツレの一人が夜に押しかけてきて、俺の部屋でだらだら過ごしながらそう言った。そんな要望に応える義理もへったくれもないので、俺は勝手にドウゾ、と本を読みながら答えた。

その答えが気に入らなかつたらしく、ツレは立ち上がって宣言した。

「今から2つ、怖い話をします」

「どつぞ」

「どちらかが嘘で、どちらかが本当です。当てましょう。外したらアイスを買ってくるよ」

「勝手なルールを作るんじゃない」

こちらの文句は聞こえていないらしく、完全スルーをしてツレは話し出した。

「某学校に、Aという男子児童がいた。彼はある日、どうしてもしなければいけない宿題をとり、夜中に学校へと向かった」

唐突なのはいつものことなので、俺は本を置いて話を聞いてやっ

た。

負けたら確実にアイスを買に行かされるに決まってるし。

「けれど、帰り際校門のところ、宿直の白井先生（仮）に会う。先生はAを茶でも飲んでいかないかと、誘った。Aは先生の申し出の手前、断れなかった。以来、生きているAを見た者はいない」

「なんじゃそれ」

「実は、白井というのは教員ではなく変質者で、Aは暗がりや彼に殺されて、白井はそのままどこかに死体を持って逃げた」

「怖い話だな」

色んな意味で。

話し終わったツレが、ふふんと得意そうに笑うのを視界の端で見ながら俺は手を挙げた。

「質問」

いくつか気になるところがあったので、聞いてみる。

「まず、白井は変質者なのに、何でAは先生と思ったんだ？」

「知らない先生がいてもおかしくないくらい、クラスの数が多かったから」

「本当の宿直はいなかったのか？」

「ちょうど、見回りにでてたところだった」

矛盾はない……ような気がする。

「事実であっても、おかしくないよな」

「ホウホウ」

どこぞの小人のような声をあげて、ツレは目を輝かせた。

「じゃ、もう1つの方。話の筋は同じ。ただし、白井が変質者じゃなく幽霊だった。さて、どちらが本当の話？」

「………まてまて、ちょっと考えるから」

えーと。忘れ物をとりにきて、校門の前で幽霊に話しかけられて、殺されて死体を持って行かれたと。

どこかのヘタな怪談だろうか。次に白井に狙われるのはお前だ！
くらい言っておいたら、小学生は喜ぶかもしれない。

「そりゃ、そつちが嘘だろ」

「何故」

「会ったのが幽霊で、Aが行方不明になったのなら、何が起こったのか知る術がない。なんで話しかけられて茶でもしばかな〜いと誘われたところまで分かるんだ。だから、その話は作り話だ」

「ファイナルアンサー？」

「うん」

「……2つほど前提を忘れていることを指摘しよう、ワトソン君」
その言葉に少しだけ身構える。こういう風に話す時のツレは、ろくなことを言わない。

今まで信じていた世界を根底から覆して、信じるに値するものはどこにもないと鼻で笑うのだ。

「変質者である白井が逮捕され、事件が解明されたのであればこの話は成り立つだろう。けれど、彼はまだ捕まっていない。話していない。この場合、事件が起こったときに何があったのかは、誰にもわからない。彼が幽霊である場合と同様に」

「……………」

「2つめ。誰も見ていない事件でも、真相が明らかになる場合がある。例えば、殺されたAが亡霊となって現れればそれで済む」

「……………」

押し黙った俺を見て、彼女はとろけるような笑顔を見せた。

毎度思う。靈オタクでこんな性格でなければ、彼女はさぞかしモテるであろうに。

「さて、真実の話はどちら？」

「うんやっぱり、冬に食べるアイスは最高！」

「そりゃよかったな」

嬉しそうにバニラアイスをぱくつくツレを見て、俺は言った。

寒い夜に、コンビニまで買い出しに行かされた恨みを込めて、自分の分のパピコにかぶりつく。

そしてパシリから帰るまでおあずけにされた答えを求めた。

「で、結局どっちが本当なんだ？」

「ん~~~~~? 前者」

「最初で合ってんじゃねえか!! ていつかそれひねりがねえな
!?!」

「わかんないで降参した、淳平が悪い」

「……………犯してやろうかこの女。いや、落ち着け冷静になれ。こ
ういう奴だと分かっていたはずだ。」

「なにせよ、Aが可哀想な話だな」

「そうだね。まだ死体も見つかってないし」

なに？

「犯人の白井（仮）も自首するといいんだけど。うちの母校の小学
校の話で、30年前だからもう時効かな」

待て。

「じゃあなんでお前が、その詳細を知ってたんだ？」

聞くとツレは当然のことのように答えた。

「校門の前に生えてる桜の木が教えてくれたから」

どこで誰に見られてるか分からないから、犯罪はやめときなよ。

彼女はそう言って、からからと笑った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8416v/>

幽ろい

2011年10月9日14時19分発行